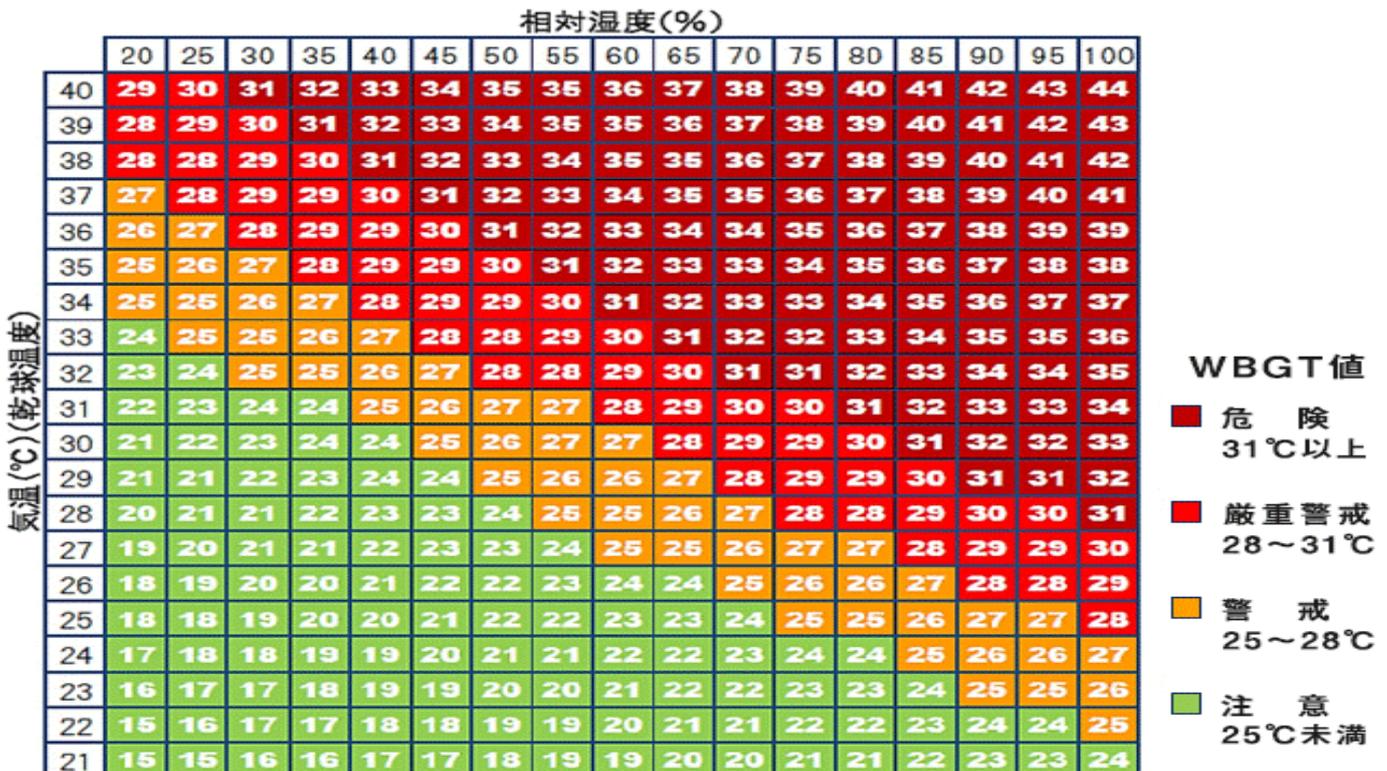


熱中症は- 気温と湿度の関係で危険性が決まる (WBGT値)

極端な言い方ですが、熱中症の危険性は気温と湿度によって決まると言っても過言ではありません。もちろん、他の要素も絡んできますが、まず大切なのはこの2つです。ところが、気温に注意は払っていても湿度を気にしない人がほとんどのようです。同じ気温でも湿度が高いと熱中症になりやすくなるのですが、この話をすると「えっ、そうなの？」と驚かれることが多いので少々不安になります。

熱中症に深く関わる気象的な主な要素としては「気温」「湿度」「輻射熱」「気流(風速)」の4つがあります。人は、さまざまな体温調整機能を備えていますが、暑いと汗をかき、それが気化する際に体の熱を奪って体温を下げるという基本的な機能は皆さんもご存知だと思います。湿度が高い梅雨時には洗濯物が乾きにくく、湿度が低い季節には乾きやすいのと同じように湿度が低いと汗が気化しやすくなって体温が下がりやすいのですが、湿度が高いとその逆になります。

また、風が強いと汗が気化しやすくなり、体温も下がりやすくなります。輻射熱は、ビルの壁やアスファルトの地面などから放射される熱のことです。これら4つの要素の測定ができれば一番理想的な状況を知ることができるのですが、気温と湿度はともかくとして、輻射熱や風速は専門の装置がないと測ることができません。そこで、気温と湿度をの測定値を元に熱中症の予防の指針を知る方法があります。それが、ヒートインデックス (Heat Index) やWBGT(湿球黒球温度)近似値です。



WBGT値とは 気温、湿度、日射・輻射熱の3要素を取り入れ、『蒸し暑さ』を1つの単位で総合的に表しています。人体と外気との熱収支(熱の出入り)に着目し、人が受ける暑熱環境による熱ストレスの評価を行う指標として活用が推進されています。気温ではありません